

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 516 号 ] 2005 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.516  
June 2005

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## “ 湖畔の教会でバッハを ” 野尻湖 2005

佐々木まり子さん(アルト)の 独唱カンタータ<第 2 弾>

昨夏の野尻湖演奏会では、バッハのカンタータ作品中でも最高の評価を得ている曲のひとつ BWV78《イエス わが心を》の抜粋と、2 曲のアルト独唱カンタータ、BWV35 と BWV170 という異色のプログラムを組み、聴衆の皆さんには大いに喜んでいただきました(2004 年 8 月 7 日、神山教会)。

今年もひきつづき、アルトの佐々木まり子さんをお招きし、2 曲の独唱カンタータをご披露いただきます。さらに合唱団も、バッハの代表作であり、もっとも人気の高い BWV147《心と日々のわざもて》(合唱部分)などをもって、皆さまをお迎えします。

東京バッハ合唱団の野尻湖演奏会は、すでに 40 年を超える歴史をもち、地元ですっかり定着しました。会場となる神山教会は木造の素朴なチャペルであり、コンサートのころは毎年、セミ時雨につつまれます。

周囲は、かつて欧米の宣教師たちの避暑地として形成された別荘村(野尻湖協会: N L A)で、聴衆の大半もこの滞在者ですが、最近では、このコンサートを目当てにお出かけくださるご常連の方々も増えました。

ぜひ一度、お立ちよりくださいますよう、お誘いいたします。(お問合せ: 東京バッハ合唱団事務局)

### 野尻湖特別演奏会 2005

アルト独唱

カンタータ第 54 番《抗え いざ罪に》

混声 4 部合唱 + 斉唱

カンタータ第 85 番《われは善き牧人》

アルト独唱 + 合唱コラール

カンタータ第 169 番《神にのみ わが心献げん》

混声 4 部合唱

カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》より  
冒頭合唱 心と日々のわざもて / コラール イエス わが喜び

アルト: 佐々木まり子

合唱: 東京バッハ合唱団

ピアノ: 内山亜希

指揮 / 訳詞: 大村恵美子

2005 年 8 月 6 日(土) 19 時開演

神山教会(長野県野尻湖畔・国際村)

入場無料

3 頁に「ご案内」があります。ご参照ください。

### 野尻湖特別演奏会プログラム 歌詞と解説

カンタータ第 54 番《抗(あらが)え いざ罪に》  
„Widerstehe doch der Sünde“ BWV54

#### 【歌詞】

1. アリア (アルト)

抗(あらが)え いざ 罪に

毒は なれを 襲わん

サタンに 惑わざれ

み栄え 汚す ものは

死の 呪い 受けん

2. レチタティーヴォ (アルト)

寄せくる うるわしの 罪の すがた

されど その実(み)は

いたき 悩み、しげき 禍い

こがねの 道 追い求むれど

ゆきつくは 虚ろの 白き墓なり

いつわりの 歩み

入ること あたわず 神のみ国には

鋭(と)き 剣(つるぎ)のごと

そは 肉と 霊を ひき裂く

3. アリア (アルト)

サタンより 罪は 出づ

悪魔の 呼び入れし もの

ただしき 信仰もて

われら たち向かえば

罪は ただちに 疾(と)く しりぞきぬ

#### 【作品について】

バッハは、アルトのためにソロカンタータを 4 曲書いています(BWV35 と BWV170 は昨年この場所で演奏され、残る 2 曲が今回の曲目、BWV54 と BWV196)。そのうち、この第 54 番《抗え いざ罪に》を除く 3 曲は、ライプツィヒ・トーマス教会カントル就任後 4 年目となる 1726 年に集中して作曲されていますが、この曲だけがヴァイマル時代(1708 - 1717 年)の 1714 年もしくは 1715 年(バッハ 30 歳頃)に作曲されたものと考えられています。

ヴァイマル以前のカンタータの特徴は、ライプツィヒで確立されることになる、終曲の 4 声体コラールがいまだ置

かれていないこと、複数のヴィオラパートを持つ場合があることなどですが、このカンタータはまさしくそのような特徴を備えています。1714年3月にバッハは、それまでのオルガニスト兼宮廷楽師から楽師長に昇進し、毎月1曲カンタータを作曲する義務を負いましたが、以降この時期に、現存する教会カンタータ約200曲のうちでも存在感のある20曲余りを世に送り出しています。

このカンタータは、用いられた歌詞の発見(1970年)により、復活祭前第4主日のために作曲されたことが判りました。ダルムシュタットの宮廷詩人G.C.レームスの手になる自由詩の歌詞(1711年)は、この主日に朗読される福音書ルカ11章14-28節と使徒書簡エフェソ5章1-9節を基礎として、悪魔の仕業である罪を正しい信仰で退散させ、神の国に到るべしと説いています。

第1曲アリアは、歌詞「サタンの惑わし」、あるいは第2曲レチタティーヴォの「うるわしの罪の姿」を基本構想にしています。ヴィオラと通奏低音が、冒頭から持続主音上で響く不協和音(7度の和音)で悪魔の仕業たる罪を不気味に示し、ヴァイオリンは「静かな波の動きのモチーフ」を用いて、甘く柔らかな旋律で、うわべの「平安」あるいは「幸い」を示して、またそれは、甘き毒が浸透していく様子とも思えます。見事に悪魔の二面性を描いています。その中で歌い手は、あらがい「を長い音価で歌いますが、それは悪魔の誘惑に負けない、正しい信仰の揺るがぬ姿なのです。

第2曲レチタティーヴォは、その前半で、福音書マタイ23章27節から展開された内容を語ります。最後の数小節でアリオージとなり、鋭(と)きつるぎ「が(肉と霊を)引き裂く」様が通奏低音の16分音符の走駆により表わされます。

第3曲アリア(終曲)の歌詞は、使徒書簡第1ヨハネ3章8節を引用して始められます。曲は、ダカーポ形式ではあるが、ヴァイオリン、ヴィオラ(ともにユニゾン)、通奏低音、アルトからなる4声のフーガとなっています。フーガの主題と対旋律は歌詞に則して形成され、主題は半音階下降で「罪」を示し、第1対旋律は罪の噴出の如き16分音符の走駆が「サタンより出づ」を示しています。一方で冒頭から主題を支える対主題は、8分音符の力強い確かな足取りでもって、我らの「立ち向かい」を示しています。

(解説:橋本眞行)

カンタータ第85番《われは 善きまきびと》  
„Ich bin ein guter Hirt“ BWV85

【歌詞】

1.アリア(バス)

われは 善き まきびと  
その いのち 棄つ おのが 羊の ために

(ヨハネ10:11)

2.アリア(アルト)

イエスは 善き まきびと  
主 おのが いのちを  
羊の ために 投げ出しぬ  
主より そを 取り去る 者 なし

イエスは 善き まきびと

3.コラール(ソプラノ)

主は わが 頼める  
まことの まきびと  
緑の 牧場に  
羊を 導き  
みぎわに 憩わせ  
わが 魂を 清む  
み恵みをもて

(Cornelius Becker „Derr Herr ist mein getreuer Hirt“ 1598 第1節)

4.レチタティーヴォ(テノール)

みな 眠る とき  
主は 目覚めて 守りたもう  
ああ 羊は 安らかに 草を 食(は)み  
いのちの 小川に 潤う  
黄泉の 狼 押し入り  
呑みこまんと すれど  
まきびと そを 退けたもう

5.アリア(テノール)

見よ 愛の みわざ  
わが イエス 堅く  
主の 群れを 抱きて 守りたもう  
十字架に 注ぎたまえり 尊き 血を  
主の 群れを 贖(あがな)わんと

6.コラール

まことの まきびと  
われは 揺るがじ  
去れよ わが 敵(あだ)  
怖れ 苦しみ もて  
われを 脅すとも  
神は わが 友  
われには 神 あり

(Ernst Christoph Homburg „Ist Gott mein Schild und Helfersmann“ 1658 第4節)

【作品について】

1725年、40歳の作。バッハはイエスを羊飼いに譬えた内容の音楽を数多く作曲しているが、それらの中でもこのカンタータが特に美しいのは、最初の「キリストの声」であるバスのアリア「われは善きまきびと」を受けて、アルト、ソプラノ、テノールと、各声部の独唱で「主は善きまきびと」と次々に応答し、最後にコラールでしめくくる、その師弟、神と人への信頼を印象づける構成も大いにあざかっている。

落ち着いた音域の楽器編成(第1曲バスにオーボエ、第2曲アルトにチェロ、第3曲ソプラノにオーボエ、第4、5曲テノールに弦合奏)もすばらしく、「私は羊飼。よい羊飼は羊のために生命を捨てる」という、イエス自身による形容の中でも、いちばん原初的な姿に近い形容の救主に対する、牧歌的な素朴な信頼関係と、大気に満ちる幸福感が、あざやかに表現されている。

(大村恵美子『バッハの音楽的宇宙』より)

カンタータ第 169 番《神にのみ わが心献げん》  
„Gott soll allein mein Herze haben“ BWV 169

1. シンフォニア

2. アリアとレチタティーヴォ (アルト)

神にのみ わが心 献げん

世の誘(いざな)い

価(あたい)なきものを われに 崇めさせ

言いよて わが友を 装う、されど

神にのみ 心 献げん

主にこそ 宝を見いださん

ここかしこには 主より 出ずる 喜びあり

主は 恵みの 泉

溢れいずる 大なる みなもと

つねに 汲めども 尽きせぬ

生命(いのち)に 満つ

神にのみ わが心 献げん

3. アリア (アルト)

神にのみ わが心 献げん

主にこそ 宝を見いださん

悪しき 世にも われを 愛し

かしこにては 主の 家に

われを 憩わせたもう

4. レチタティーヴォ (アルト)

神の 愛とは

心と 魂(たま)の 憩う 楽園なり

黄泉を 閉ざし み国を 開く

エリヤの くるま み国に 導き

安きを たもう

5. アリア (アルト)

さらば

わが 内なる 世の すべての 愉しみよ

わが 胸

地にて 主の愛を

たゆまず 学ばん ため

さらば

驕り 高ぶりよ、忌まわしき 肉の 念い

世の すべての 愉しみ

6. レチタティーヴォ (アルト)

されど 忘るな 主の み言葉

神と 隣人(となりびと)を 愛せよと 記(しる)さる

7. コラール

主の 愛よ われらにも

熱き 思い たまえ

たがいに 愛し 一つなる

ところに 平和を たまえ

キリエ エレイソン

(Martin Luther „Nun bitten wir den heiligen Geist“ 1524 第3節)

【作品について】

終曲コラールを持つ、このアルト・ソロカンタータは 1726 年の三位一体節後第 18 主日のために作曲され、その 10 月 20 日に初演されました。

この時期に書かれた他のアルト・ソロカンタータと同じく、オルガンが活躍します。現在では失われた、おそらくはオーボエ協奏曲がオルガン協奏曲に編曲され、その第 1 楽章と第 2 楽章がこのカンタータの第 1 曲と第 5 曲に用いられたようです。この協奏曲は、さらに後に、チェンバロ協奏曲(第 2 番ホ長調, BWV1053)として再度編曲され、今日に残っています。

このカンタータの台本作者は不明ですが、この主日に朗読される福音書マタイ 22 章 34 - 46 節に基づき、主と隣人への愛をテーマとしています。主への愛については、聖書の「主を愛すべし(Du sollst lieben Gott)」という表現から「主が私の心を持つ(Gott soll allein mein Herze haben)」というように、主客を逆転させた表現で論旨を展開しています(訳詞では 神にのみわが心献げん)。そして、奢り、富、目の欲など、わが身に巢食う全ての世のたのしみと訣別し、ひたすら主の愛に学ぶことを説いています。隣人への愛については、第 6 曲のレチタティーヴォで短く触れているに止まっています。

第 1 曲のシンフォニアに続く第 2 曲では、アリオーゾで 3 度にわたり 神にのみわが心献げん との主題を詠唱し、そのたび毎にレチタティーヴォで、注釈として、この世の否定と 宝 としての神の愛を語ります。第 3 曲アリアは、第 2 曲に引き続き、同じ歌詞の主題とその注釈となっています。神の愛への憧れを感じさせるオルガンのオブリガートを伴い、温かくも雄弁な通奏低音とアルトとのしっとりした会話が聞けます。第 4 曲レチタティーヴォでは神の愛の何たるかが語られ、第 5 曲では、そのような神の愛にあるならば、この世の全ての楽しみに訣別しようと謳います。シチリアーノのリズムに乗せて、転調を多用することで、この世の楽しみが意味の無い、虚ろなものとして描かれますが、途中で さらば と歌う下降音形や 肉の念い などでの音の使い方が絶妙で、何度もはっとさせられます。隣人への愛に言及する第 6 曲の後、第 7 曲(終曲)にはルターの聖霊降臨節のためのコラール(1524 年)が置かれ、古雅で静かな祈りの中で曲を終えます。(解説:橋本眞行)

東京バツ八合唱団:野尻湖コンサートと合宿のご案内

< 野尻湖特別演奏会 >

2005 年 8 月 6 日(土) 午後 7 時開演、入場無料

会場:野尻湖畔「神山教会」(国際村=NLA 内)

< 合宿 >

2005 年 8 月 4 日(木) 午後 ~ 7 日(日) 午前

滞在先:長野県・野尻湖畔「野尻レイクサイドホテル」

(電話 026-258-2021)

コンサートには、どなたでもご来場いただけます。ただし、交通手段は予めよくお調べの上、お越してください。右記サイトが便利です。<http://www.saturn.dti.ne.jp/~woow/index.html>

団員以外で合宿に参加をご希望の方は、事務局までお問い合わせください。連絡先:本紙タイトル囲み内参照。

## 日本語でカンタータを歌う意味

第 97 回定期演奏会 (5 月 15 日) を聴いて

本田 節子 (元団員・後援会員)

定期演奏会に伺うのは本当に久しぶりで、石橋メモリアルホールに着いたときは古巣にもどったような、不思議な温かさを感じました。開演前のざわめきのなか、プログラムに目をやりながらも、想いは、舞台下で満を持して出を待っている合唱団の皆さんの上にあります。たくさんの思い出が詰まっているあの狭い空間が、私は好きでした。

開演のベルとともに皆さんが舞台に登場してきました。懐かしい顔、顔、顔……。おや？ いつもと何かが違う感じですか。とにかく立ち姿がみょうに美しく、しかも毅然としているのです。この演奏会にかけられる並々ならぬ自信と意気込みとも受けとれて、期待に胸がふくらむ思いでした。今回はコラールカンタータが 3 曲も盛り込まれた贅沢なプログラムで、美しいコラール旋律をベースに、さまざまな変奏が繰りひろげられるのを、大変楽しみにしていました。

1 曲目《ほめ讃えよ 主を》(カンタータ 129 番) が始まり、明るいコラールとそれに重なるフーガが生き生きと響きわたります。舞台では皆さんが笑顔さえ見せて輝かしく主を讃美しています。言葉もしっかり立っていてメリハリがあり、聴衆にメッセージを伝えようと努力していらっしゃるのがよく分かります。これで最初に驚いた、立ち姿の美しさのなぞも解けようというものです。

こうして曲が進むにつれて、私はごく自然にバッハの音楽に身をゆだねていきました。ふと気がつくと、臨席の婦人がしきりに涙を拭いていらっしゃるように見えます。2 曲目 (カンタータ 137 番) の終わりの、明るく力強いコラール合唱の部分だったので、私は少なからず動揺しました。

休憩時間、婦人はせつせつと身の上を話してくださいました。10 年前、ご主人が交通事故のため脳に大きなダメージを受け、重篤な状態がつづくなか、彼女は新約聖書を一字一字手書きで写しとり、その後この東京バッハ合唱団の存在を知ってからは、可能なかぎり演奏会に足をはこび、CD も購入して、毎朝、目覚めと同時に一日中、バッハを聴いているということです。「教会にも行かないし、信者でもないけれど、こちらのバッハの歌は私を救ってくれます。今は夫もかすかに口がきけるようになりました。私には神様がついてくださると信じています。遠方から来ているのですが、ほんとうにいつも慰められます。」

彼女の言葉に、私はハッと打たれるものがありました。もしも日本語ではなくドイツ語で歌っていたら、彼女に慰めを与えることができたでしょうか？ まさに日本語による「バッハ・カンタータ 50 曲選」完結記念の公演にふさわしい、素晴らしいお客様といえるのではないのでしょうか。

後半の、カンタータ 147 番《心と日々のわざもて》はあまりにもポピュラーな曲ですが、これほどしみじみと聴いたのは初めてでした。アルト・アリア 感わず心よ なが主を証しせよ の美しさには凄みさえ感じられましたし、2 度くり返されるコラールには、まさに生きていく喜びがツツツと湧いてくるのを感じました。

アンコールの最後に、このコラールを聴衆にも歌わせて

くださったのは良かったですね。私は臨席の婦人の涙に胸を詰まらせながらも、せめて彼女の心の平安を祈って、大きな声で歌わせていただきました。

何度も「ありがとうございました」とおっしゃる彼女の言葉は、そのまま、大村先生と演奏をされた皆さま方への感謝の言葉と受けとめます。ほんとうに素晴らしいコンサートをありがとうございました。

## 創立 43 周年の思い

大村 恵美子

最近、偶然にも、私の知人の村井實氏 (教育学者) の、お若いころに訳されたという、チャールズ・ラムの有名な詩 “Old Familiar Faces” の訳詩稿をいただきました。紙面のつごうで、7 節のうち最後の 2 節だけをご紹介します。

兄弟どころじゃないくらい、心を許した間柄  
同じ炉端に寄り添って、も一度生きたい古馴染み

死んだり去ったり別れたり、みんなちりぢりばらばらに  
いつかひとりも残らずに、いつしまった古馴染み

懐かしい、もの悲しい、すばらしい詩ですが、実を言いますと、この合唱団を 40 数年つづけてきた私にとっては、こういう感慨に共感をおぼえることは、本質的にはありえないのです。ふつうなら歳をとるとともに、こういう心境に近づくことでしょう。けれども、私の心のなかでは、合唱団の始めからのメンバーも、途中で退かれた方も、これから入られる方も、みんな、私たちが演奏を何十年とつづけていることなかに、同じように入ってきて、今いなくても、またいつでもこの中に加わってくださるというイメージが、はっきりと生きているのです。ですから、去るものは追わず、諦めよう、さびしいなあ、という気持ちはなく、どの方々の心の中にも、現在もバッハの音楽が、私たちとともに鳴り響いている、という感じなのです。

演奏会も、出版譜も、日本語演奏 CD も、その実現のために、これからどんどん広まってほしい。そして終わらない、喜びの輪となって、この地上にありつづけてほしい、と願うのです。

いっぽうで、世の中は今後、家でパソコンの画面を見ているだけで、いろいろな活動に加わっているつもりになる人たちが激増し、実際に自分のからだ、自分の時と金と努力を費やして行動する人々を凌駕するようになり、文化も潰れてゆくのではないかと、というおそれも感じます。

人生にとって、志を同じくする人々とともに時を過ごしながら、現実と同じ目標をめざして協働すること、これ以上に <しあわせ> の実感を味わえる体験は、むしろ、ますます貴重なものになってくることでしょう。

そう思うと、そのようなことのもっとも理想的な場として合唱団の活動も、それを支える後援会の組織も、衰滅せずに維持発展させるよう、今後も努力することが、私たちの使命だといわなければならないでしょう。

Fine